

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720184

研究課題名 (和文) 南アジア社会のイスラーム化に関する歴史文献学的研究

研究課題名 (英文) A historiographical study on the Islamization of the South Asian society

研究代表者

真下 裕之 (MASHITA HIROYUKI)

神戸大学大学院・人文学研究科・准教授

研究者番号：70303899

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：南アジア史

### 1. 研究計画の概要

13世紀から17世紀における南アジア社会のイスラーム化の諸相を歴史文献学にもとづいて明らかにすることが本研究の目的である。本研究では社会のイスラーム化を一定地域におけるイスラーム教徒人口が増加するプロセスと見なし、その変化の現象を以下の三つのテーマ、すなわち A. イスラーム教徒の来住、B. 在来宗教の信徒のイスラーム改宗、そして C. 在来宗教の信徒のイスラーム教徒による物理的排除、に分解して、それぞれ研究を進める。これにより、チュルク化、ペルシア語化そしてイスラーム化という三つのプロセスが並行的に進行したこの時代の諸相の一端を明らかにし、この時代の南アジア社会の動態を総合的に理解する一助とすることを本研究は目指している。本研究の基礎的な素材となる歴史文献は大まかに分類すると①聖人伝、②イスラーム神秘主義関係文献、③名士録、④詩人伝であるが、その多くがいまだ公刊されておらず、手写本の状態で世界各地に所蔵されている。このため所蔵先から手写本の複写を購入したり、これが不可能な場合には現地調査を行ったりすることによって、これらの文献の内容を解読・整理することが本研究の主たる内容となる。

### 2. 研究の進捗状況

過去3年において次の成果等を得た。

(1) インド、パキスタンで出版されている、南アジアのイスラーム史関係、とくにイスラーム神秘主義やイスラーム社会の聖人に関する一次資料及び研究文献を入手して、所属機関に備えた。本邦未将来の文献も数多くあり、とくに現地図書館の手写本資料の目録

については、日本の公的機関に所蔵されていないものも入手したので、今後の現地での資料調査をより綿密かつ効率的に実施できることになった。

(2) 英国、フランス、ドイツ等の研究機関に所蔵されている未公開の聖人伝資料、イスラーム神秘主義関係文献の手写本の複写を、マイクロフィルムやデジタルデータの形で多数入手した。入手した複写資料のうちマイクロフィルムで提供されたものはすべて、デジタルデータに変換し、いずれも整理・分析して、研究に供した。

(3) 以上の作業によって得られたデータを参考にしつつ、次のような知見を得た。

a) 南アジアの海港都市スーラトに、メッカ巡礼船の発着地としての意義を見だし、インド洋海域におけるイスラーム・ネットワークの広がり的一端を明らかにした。この知見は、南アジア社会のイスラーム化とイスラーム世界他地域との交流との関係を考える上で、少なからぬ意味を持つものと思われる。

b) 南アジア社会のイスラーム化における推進力の一つであったイスラーム神秘主義の聖人たちの働きばかりでなく、彼らを取り巻く政治権力者たちの動向についても、従来の研究史においては着目されていなかったいくつかの重要な情報を得た。

c) 本研究が取り扱う歴史文献のほとんどがペルシア語で書かれたことに鑑み、南アジアにおけるペルシア語文化の展開についても本研究で得られた知見を参照しつつ調査をすすめ、在来インド諸語やチュルク語との密接な関連を保ちつつペルシア語が運用されていた、南アジア社会の重層的な文化環境が明らかになった。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

a) 未公開の写本資料の複写の収集という基礎作業が順調に進んでいる。

b) これによって研究目的に資する知見が得られつつある。

c) これによって派生的に得られた新たな知見も複数ある。

d) 一方、政治情勢が不安定なためにパキスタンでの実地調査を延期してきた。この点により「①当初の計画以上に進展している」と評価することはできない。

### 4. 今後の研究の推進方策

上記 d) の欠を補うため、平成 22 年度においては実地調査を集中的に実施する予定である。予算をここに手厚く配分するため、資料の複写購入はある程度抑えざるを得ないが、過去 3 ヶ年に得られた資料をさらに精密に分析することによって、これを補う予定である。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 真下裕之「南アジア史におけるペルシア語文化の諸相」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界：もうひとつのユーラシア史』北海道大学出版会 2009, pp. 205-231. (査読有り)

② 真下裕之「イスラーム化の史実と伝説：南アジア史におけるイスラーム信仰戦士」共生倫理研究会編『共生の人文学：グローバル化時代と多様な文化』神戸大学 2008, pp. 190-214. (査読無し)

③ 真下裕之「デリー・スルターン朝の時代」小谷汪之編『世界歴史大系 南アジア史 2 中世・近世』山川出版社 2007, pp. 102-134, 68-72. (査読無し)

[学会発表] (計 2 件)

① 真下裕之「インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について」史学研究会大会 2010 年 4 月 17 日、京都大学・文学研究科

② 真下裕之「インド洋海域史における海港都市：17 世紀前半におけるインド西海岸の海港都市スーラトの一側面」国際学術シンポジウム「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」2008 年 11 月 27 日、韓国海洋大学校(韓国・釜山)

[図書] (計 1 件)

① Hiroyuki Mashita (ed.), *Royal Asiatic Society Classics of Islam II. The Muslim World 1100-1700: Early sources on Middle East History, Geography and Travel*. Routledge: London and New York, 2007.